

私一人の家へきてくれたエミリーに当然のお返しです。シャイはメイで慣れており、エミリーは野性味が残り、利口、従順が強い個性と溶け合った魅力ある犬でした。愛情は世話をしてやることとし、その個性はそっとしてやるようにしました。神戸の生活は長く続かず、家主の悪質から住人は出て行き、再び家探し、二年前に現在の摂津市に来ました。安威川が近くエミリーは自然の残るこの川畔を好みました。去年の夏、急に元気を失い食物を戻し、獣院に行っても癒えず「アーク」で聞いた動物病院にと思い、タクシーを頼み断られました。別のタクシーに当ればよかったのですが冷静を失って終い、又近くの獣医に行きました。検査の結果、ガン細胞が見つかり、手術、あと回復を待たず抗ガン剤と注射を与え、二日後に死にました。発病から一ヶ月も立たず、手術、抗ガン剤は説明の上推めた獣医ですが採否は飼主にあり、私が検査の結果に絶望して判断を失って終ったのです。総てが終わってから、手術後のまだ何も口に出来ない状態に副作用のきつい注射と投薬は誤治療でないか、と気付き、それを承諾したことにはケースは異ってもメイの二の舞いをしたと思いました。「アーク」や良き先輩にアドバイスを受けることも頭になく、私の責任です。先で助からぬ命だったとしても、余計な苦痛を与え、一声もあげず11才の命を閉じたエミリーに詫びきれぬ思いでした。

自責に体調をくずし愚かと分かりつつ抜け出せず、秋が来て「アーク」を尋ねました。もう一度里親になることが最良の道と考え、エミリーを拾い育てて下さったお礼と、お詫びも伝えなかったのです。そして、エミリーの故郷の能勢の山にその骨の一片を埋めるために——。メイを失い再び犬は飼わないと思い、エミリーに会った奇跡を心の奥に期待して、きびしい現実を見ました。犬がもつあの純でかすかな哀しみをたたえた美しい瞳、エミリーに似た犬はいました。彼は他の犬のように戸口に來ず、棚の上に座り私を見下していました。虐待を受け捨てられた幼犬は「アーク」に救われて、心身の傷は癒えたくましい成犬になっていました。76才で家族のいない私は、彼を希望して行ったものではありませんがその瞳に後髪を引かれる思いでした。オリバーさんの温かい言葉に感謝しつつ、飼えない淋しさをかみしめ、総ての犬の倅せを祈り帰ってきました。「アーク」で見たもう一つのきびしさは、昨今、ニュースレターにある事件です。結果「アーク」は犬達の増加で、その過密とスタッフの多忙さが心に重く残りました。異状と云えるペットブーム、その裏面を考えるより、犬を飾り立て笑いこる人の方が多い世の中です。愛犬家、と云う言葉の使い間違い、何とニセモノの多いことでしょうか。私は「犬の飼い方」はその国の文化の象徴と云えると思います。愚かな飼

主だった私ですが、犬の病には経験のある人の意見を聞き、誠実で信頼出来る獣医と納得のゆく話し合いをして、後悔のない治療をしてやって下さい。特に一人暮らしの飼主の方は一人で抱え込まれないように。そして、飼える限り「アーク」や捨てられた犬・猫の飼主になって下さい。飼いたくても飼えぬ真の愛犬家を私は多く知っています。飼える倅せを大切に、傍にいたことが当り前になり、失って知るその温かさ、「一期一会」は人間だけのことでありません。人間と総ての生きものとの出会いであり、別れでしょう。人間の思い上がりは、地球の自然を破壊し、動物に手枷足枷をしてきました。彼等はいつも被害者なのです。貴女の愛を惜しみなく与えてやって下さい。

エミリーの好きな散歩道に春は又めぐり、空中に櫻は満ち、川には鴨が子を連れて泳ぎ、自然の営みは人間の悲喜に関わらず繰返されています。詫び続け一人で歩く私に「お母さんもういいよ」とエミリーの声が聞こえます。懐しい思い出、安らぎを一杯くれたエミリーとメイ、ありがとう、そして、ゆるしてね。私の心を見透かすようなお前たちの美しい瞳は、いつまでも私の心に生き続けるでしょう。

ピムが死にました。ご存じの方もあってでしょう——数年前、ペット・スポンサー申込書の表紙を飾りましたから。それ以外は、平凡な犬でした。控え目で、はにかみ屋で、自分を主張することのない雑種犬。ともすれば、見過ごされる存在。彼はあるお祭りの時に保護されたのですが、大怪我をした足にギブスをはめていて、患部がひどく腫んでいました。飼主は、治療を続ければ手間と金がかかるのを嫌ったものと思われます。捨てられたピムは、その後ずっと、びっこを引き引き歩かなければならませんでした。しかし、彼は自分が受けた不当な扱いに抗議したことなど一度だってないはず。私が初めて会ったとき、彼はリックと同じ囲いに入っていました。リックは、ピムとはおよそ正反対——きわめて外向的な性格で「世話焼き」タイプ。だからこそ、このコンビはうまくいったのでしょう。彼らは「ルームメイト」としてお互いに満足していたに違いありません。彼らを散歩させるのを私は楽しみにしていました。リックが死んだとき、ピムは明らかに落ち込んでいました。「兄貴」を失った悲しみから完全に立ち直ることはないでしょう。

アークで過ごした10年間、ピムにとって、



Best Friends - Rick & Pim

ますますの暮らしだったとは思うものの、私の心の中のどこかに、彼に悪いことをしてしまったという後ろめたい気持ちがあります。なぜ里親が見つからなかったのだろう……おそらく、彼を裏切ることになったのは、日本の社会——子犬、純血種犬をもてはやし、ピムのような「雑種の成犬」に価値を認めようとしない世間——なのでしょう。しかし、私からすれば、ピムこそ、アークの活動の真髓であり、最も本質的なものを代表する存在です。私どもの使命は、誰からも必要とされず、捨てられたり、虐待された動物を引き受けて世話をするところだからです。ピムや彼と同類の数え切れない動物たちこそ、アークの「かけがえない宝物」なのです。

ピムと言えば、私はいつも「きたるべき世での順番」を述べた聖書の一節を思い出します——「しかし、多くの先の者はあとになり、あとの者は先になるであろう。(日本聖書協会訳)」当世風の表現に置き換えると「今は勝ち組でも後には負け組になり、負け組が勝ち組になることも多い」というところでしょうか。ピム、私にとって、あなたはいつも「いちばん」でしたよ。